

## 泥まみれ、血まみれ、それでもわが道を走る

水上 龍郎

あれよあれよという間に立ち上がった株式会社組織は、名称を日本テックとしたが、この<テック>は宮仕え当時取り引きのあったアメリカの会社 TECH CORPORATION からいただいた。technical、technology の略語である TECH (TEC ではない) はそのころの日本では私を含めて斬新に感じたと思われる。英語の発音をそのまま移しかえれば<テク>とカナ書きすべきものを<テック>としたのは、日本語で発音したときの安定さをねらうと同時に、<てくてく歩く>という日本語表現の連想を避けたからである。しかし、<てく>あるいは<てくてく>は「かなりの距離を一定の速度で歩きつづけるさま」が正確な意味であることから考えて、<テク>の方がよかったかもしれない、とその後しばしば反省した。

1965年3月6日、司法書士による正規の手続きを経て誕生した株式会社日本テックは、代表取締役の肩書きにテレにテレた私を中心に、社外取締役2名、監査役1名のほか、実作業員として営業1名、社内翻訳者3名(私自身を含む)、経理1名、デザイナー1名から構成される零細集団である。

営業員Fは、どのような経緯で私との関係が成立したのか憶えていないが、年齢は私より3つ上、四国の松山で経営していた缶詰工場が不幸にして倒産、2年前に上京して職業を転々したあげく外国語翻訳の世界に足を踏み入れたらしい。ともかく、この人には生き抜くための活力があった(と、当時の私には感じられた)。身元調べなどというのは、姑息な行為であると、私はすっかりこの先輩(?)になつてしまい、会社の設立に奔走する彼の熱意に感謝し、満腹の信頼を置いた。

翻訳者のひとりKは、一流商社をいさぎよく辞めて翻訳をライフワークにしたいと願っている、出自のいやしからぬ貴公子である。年齢はやはり私より3つ上にな

るこの商社マンは出資者でもあり、また取締役でもあった。彼の英語については、speaking はもちろんのこと、writing は折り目正しく、私は願っても無い先輩同僚として遇し、ふたりの切磋琢磨による会社レベルの翻訳品質向上を期待して胸を躍らせた。もうひとりの翻訳者 N は、駐留軍の補給関係に勤めていた精悍な顔つきの青年で、この人は writing に文法上のミスが目立ち、技術翻訳者として適格であるかどうかは疑念があったが、何よりも昨日までアメリカ人主体の社会で生活してきた生臭さが魅力であった。

デザイナー O は異色である。私の判断で仲間に加えたのだが、当時の技術翻訳の現物には回路図その他のイラストの付随している場合が多く、その面での収入がばかにならないほど大きいという私自身の経験を踏まえていたと思われる。O 君は本来の仕事に空きのあるときは、営業の補佐役としてクライアント先との原稿の授受にもたずさわった。

こうして振り返って見ると、いまあらためて2つのことが再確認できる。

第一に、この編成は私自身をはじめから孤独な存在にしているということだ。背後の共同出資者はすべて私の知人友人であったが、実際に毎日顔を合わせる社員たちは見知らぬ人ばかりであった。これは、結果としてそうなったのだろうが、責任者である私としても、ここが正念場だ、という強い信念をもったことに一因があったとも思われる。思い切って過去は引きずらない — 新しい人間たちが真新しい衣装を身に付け、未知の舞台に踊り出て自作の芝居を演じるためには、妥協は許されないというところだろうか。かなり悲壮な覚悟である。実際に、当初から参加すると意思表示のあった友人ふたりとは、経営上の責任やリスクの分担に関して何度も話し合った末、安易に同調しない方が相互に賢明だと、最終的には私自身の孤立を決意したことを憶えている。

第二は、翻訳陣に女性不在ということだ。これは、当時、技術の翻訳は男性の独壇場と見るのが当たり前であって、翻訳を発注する側も受注する側も女性を意識することはなかった。現今は、私の周囲を見る限り、技術翻訳者の半数もしくはそれ

以上が女性で占められている。この傾向は、パソコンで情報を扱う時代になってから加速度的に顕著になっているけれども、本来のモチベーションは別にある。それはそれでたいへん興味深い事実であるが、この稿では本題から外れるので議論はしない。その後 15 年ほど経過するまで、日本テックの内部にも、また外注翻訳登録者にも女性は見当たらなかったから、1965 年の編成は自然の成り行きだったと納得している。

設立直後に、法人の義務として税務署を訪れ、所定の手続きにより届けを出した。営業の所在地が東京都千代田区神田猿樂町だったので、所轄は神田税務署である。会社経営の実績をもつ先達たちが一様に言うには、千代田区神田は大小取り混ぜて企業の密集度が全国一であり、脱税の方法も巧妙で生半可な署員では対応できないほど悪質であるため、国中から選り抜きのメンバーを揃えているとのことだった。結びにいわく「神田税務署、鬼より怖い」とのことである。しかし、私の会社はまだ何の営業実績もなく、脱税などという言葉は脳裡のどこを探しても発見できないし、何よりも正当な納税の義務を果たさない会社になろうとは考えもしないから、生まれて初めて足を踏み入れた法人第 1 課で担当の署員に会っても、それほど臆することはなかった。

ただ、異例の面談があった。これは、その中年の署員によれば、翻訳業という職業が当時はめずらしく、神田署管内でもほとんど前例がないので、いわば個人プレイとも言える翻訳を組織化する理由とその実態を把握しておきたい、とのことだった。そこで、私は「技術分野の翻訳がこれから確実に増えていき、ひとりの知恵と経験だけでは達成不可能だ。「科学する心」と「高度の翻訳スキル」をもつ人材が多数あつまって共同作業をしてこそ、真の技術情報を翻訳し伝達できるのである。その理想を掲げての第一歩を自分が手がけようとしているのが、この会社組織である。翻訳作業を通して、これからやってくる情報産業の一端を担うつもりだ」などと、鬼と言われているかもしれない面談相手に向かって壮語した。鬼は、その気負いに打たれたか素直に聞いていたが、「良くわかった」という返事に続いて「ただ

ね……」と但し書きを付けた。……の中身はというと「当署の最近の事例を見ると、デザイン会社なるものが多数設立されるようになったが、その大部分が1年程度で倒産している。個人のスキルに依存する集団は、少し規模が大きくなると、その個人個人が会社に育てられた恩義を忘れて独立志向に走り、ある者は社内の同志と結託し、ある者は社外の同志を抱きこんで、結果的に社長を裏切っている。日本テックの性質も類似しているように思えるので、この点に注意されたい」とのことである。加えて、日本テックを翻訳業として当税務署のサンプリング会社としたい、したがって、帳簿の類をよく整え、いつでも当署のあらゆる調査に対応できるようにしていただきたい、と釘を打たれた。この勧告が好意的なものか、悪趣味の権化なのか、指示された新米社長には判断がつかない。複雑な気持ちで会社に帰ったが、その後しばらくは具体的に何もなく、私は<そのとき>がやってくるまで税務署のことは完全に忘却のかなたに消えてしまった。

さて、小粒ながらも一応陣容はととのい、仕事量も前からの引継ぎで過分にあり、<翻訳する翻訳会社>（単なる翻訳ブローカーではなく、社内スタッフが責任をもって質の高い作品を作成し、問題を即座に解決する集団であるとの自負を背景に、私が考案した会社の宣伝殺し文句）のスタートとオペレーションはだれの眼にも成功したように見えた。しかしながら、現実はそう甘くない。私自身は、創業2年めにして早くも、「糾（あざな）える縄」のたとえよろしく、福から禍へ、吉から凶への変転をいやというほど知らされることになる。

<まさか、どうして>ストーリーのエピローグはきわめて悲惨であるが、プロローグは他愛もないものである。1966年の半ばころ、会社は人数も2名増え、当初の狭いスペースでは翻訳作業に支障をきたすようになっていた。私は、当時、明大大学院T教授（大学に工業英語講座を最初に開設した金属学の権威者）の知遇を得ていたが、この教授のプライベートな研究所が代々木の駅前に新築されたMビルにあり、部屋の3分の2が空いているので、そこを使ったらいかがかという話があった。私は、勿怪の幸いとばかりに、代々木分室と銘打って、翻訳陣の専用作業場所とし、

神田の本社(?)には営業、経理、デザイン関係者を残した。経営者としての席は神田、翻訳員としての席は代々木ということで、私は電車で20分ばかりの距離を毎日1回往來することを原則とした。しかし、翻訳の仕事が忙しいときはとくに、神田とは電話のみの連絡で終わらせることが多くなり、この怠慢が結局は会社の不幸を招くことになるのであるが、これを<まさか>と呼ぶのは見当違いで、経営者破滅の筋書きどおりと見るのが常識であるかもしれない。

かいつまんで言えば、神田側は私の代々木偏重に業を煮やし、営業員ふたり(この年には、Fの口利きで1名を増員していた)がデザイナーを巻き込んで独立の反旗をかかげたのである。

そのやり口は巧妙だった。先ず、Fがさかんに咳きこんで体調の悪化を訴えはじめるようになり、とうとうある日、医師の診断書を持参して3ヶ月間の休養を申し出てきた。私はさすがにあわてて、自費で郊外の閑静な住宅を探して契約し、彼と彼の家族をそこに移して療養に専念させることにした。ついでに、保全と管理を条件として、病院通いなどの目的で自由に使用してかまわないというお墨付きで、会社の車(スバル360の新車)も預けた。(ちなみに、会社で運転免許をもっていたのは彼だけだった。)

あとで気が付けば、これがまったくの仮病だったのだが、不幸にして私にはその演技を見抜くだけの洞察力がなかった。彼は、休養期に入ると、自分の開拓したクライアントを車でこまめに訪問し、日本テックは近々中に解散するので、自分たちは家族を養うために新会社をおこす予定である、ついでには発注をすべてそちらにシフトしていただきたいなどと生来の口達者でくどき落としたようだ。悪意は悪意をよび、ついには会社の売上金の大半を自ら集金して(当時は、銀行振込みはなく、すべて領収書1枚で現金か小切手を手渡しされるのが一般の商習慣)、これを、<新日本テック>をスタートさせる資金に当てた。

入金途絶えていることによりやく気がついた私は、クライアントの経理部門におそるおそる電話で問合せた結果、ほとんどがすでに支払済みという回答だった。私は泣くに泣かれず、また訴える先もなく、一時は途方に暮れたが、仕事には誇り

をもっていたし、また自分の責任を棚にあげて騒ぎ立てるのは本意にあらず、と前向き姿勢に徹し、関係各社に迷惑をかけたお詫びと信用の回復を願い、足を棒にして都内をかけまわった。結果として、私の誠意が通じ、日本テックは営業員不在のまま受発注業務を正常に戻すことができたが、当面の資金繰りには文字どおり血の出る努力をした。その生々しさをここで具体的に述べるのは忍びないので、読者の想像にゆだねるが、会社創設以前の厳しい経験（前号に記載）が窮境を乗り越えるのに役立ったことは言をまたない。

その後、Fの画策した新会社はほどなく壊滅したという風の便りも入ってきて、私は複雑な思いでいっぱいであったが、ある朝会社の駐車場の片すみにスバルの姿を見たときに全身を貫いた心の痛みは、以後忘れられない人生のシミとして残った。

当然のことながら、第1期の決算はまあまあだったが、第2期はみじめなもので、税務署に事情を説明している間、担当官は私に同情したようだが、サンプリング会社としては面目丸つぶれである。当初の係官でなかったのが救いであったとは言え、あのときの大言壮語が気恥ずかしい一方、来期はりっぱな納税者になるぞと自分に言い聞かせた。なお、このときの私の陳述はすべて記録に取られた。

1968年、代々木分室を閉鎖し、書店街として名高い神田神保町にビルの一室（40坪くらい）を借りて作業場所を統一し、新たな社員構成をもとに本格的な会社作りに再発進した。新社員は原則として新聞で公募し、採用にあたっては厳正な筆記試験と徹底的な面接を導入した。正社員資格の翻訳員2名の募集では、応募者が優に100人を超えるという盛況だった。3日間連続で玉と石を見分けるという重労働を強いられたが、この数の中にはさすがに、語学能力が高くて人間的にもすぐれた人たちが存在した。

営業活動は前任者Fの背任でこりたこともあり、私自身が主力となって市場を開拓し、既存市場の健全維持につとめた。大手メーカーへの参入も順調に進み、社員総数（契約社員を含む）も20名までふくらんだ。が、<まさか、どうして>ストーリーは後を絶たない。やがて、2つのおぞましきイベントに見舞われることになるのだが、この時点では、36歳の青二才経営者が知るべくもない。（以下次号）

（OSTECジャーナル 第10号 2001年10月）